

久留米市
埋蔵文化財調査集報(I)

新 婦 遺 跡
吹 上 遺 跡

久留米市文化財調査報告書 第47集

1986

久留米市教育委員会

久留米市

埋蔵文化財調査集報(I)

新 婦 遺 跡

吹 上 遺 跡

序

久留米市は、広大な筑後平野の中心にあり、日本第二の大河「筑後川」に臨む、山紫水明のふるさとであります。この豊かな自然のもとで、旧石器時代から人々の暮らしが始まり、さまざまなドラマを展開しつつ今日までの永い歴史を刻んでまいりました。特に律令時代には、古代国家の地方行政庁である筑後国府をはじめ国分寺がおかれるなど、行政・経済・文化・交通の要衝の地として、栄えた地域であります。

従って、市域全体に多くの文化財が埋蔵されていることはいうまでもなく、今日でもその要衝の地としての位置づけは変わらず、地域の母都市として、大いに発展しているところでありますが、一方、急速な開発の波が押し寄せ、これらに対処すべく、緊急発掘調査の件数も年々増大し、これまで知られていなかった重要な遺跡の発見が相次いでおります。

本書は、この中の幾つかを取り上げたもので本市の歴史をさぐる上での資料の一環として、更には、文化財保護の啓発・普及の一助としてご活用頂けると幸いです。

昭和 61 年 3 月 31 日

久留米市教育委員会

教育長 光山利雄

例 言

1. 本書は、過去に調査され、未報告の遺跡を集録した発掘調査報告書である。
2. 本書に集録した報告は、下記の目次に記したとおりである。
3. 発掘調査は久留米市教育委員会文化部文化財担当調査係の古賀壽・大石昇・園井正隆が担当した。
4. 掲載した図面の実測・製図の作成は各担当者が主として当り、一部、平塚あけみによるものがある。
5. 掲載の遺構写真は担当者が撮影し、遺物写真は大石が撮影した。なお、本文中の遺物実測番号と図版の写真番号は同一にした。
6. 本書に示す「N」はすべて磁北方位を表わす。また、遺構表示は下記の略号に拠る。
SB……掘立柱建物跡 SD……溝・溝状遺構 SI……竪穴住居跡
SK……土城 SP……柱穴・ピット SX……その他
7. 本書の執筆・編集は園井が担当し、古賀正美の協力を得た。

目 次

新婦遺跡	3
吹上遺跡	9

本文目次

I はじめに	1
II 新婦遺跡	3
1. 調査の経過と概要	3
2. 検出遺構と遺物	4
3. ま と め	8
III 吹上遺跡	9
1. 調査の経過と概要	9
2. 検出遺構と遺物	10
3. ま と め	17

図版目次

図版 1	(1) 新婦遺跡調査区全景（東から）
	(2) SK1 遺物出土状態（東から）
	(3) SK1（東から）
図版 2	(1) SI4（東から）
	(2) SI4（東から）
図版 3	(1) SI4 南壁付近遺物出土状態（北東から）
	(2) SI4 南壁付近遺物出土状態（北から）
	(3) SI4 西壁付近遺物出土状態（南から）
	(4) SI4 貯蔵穴内遺物出土状態（北から）
図版 4	(1) SK1 出土遺物
	(2) SI4 出土遺物 (1)
図版 5	SI4 出土遺物 (2)
図版 6	(1) 吹上遺跡調査区全景（東から）
	(2) 吹上遺跡調査区西半部（南から）

図版 7	(1) S B 10 (南から)
	(2) S B 10柱穴掘方
図版 8	(1) S K 1 (東から)
	(2) S K 1 (北から)
図版 9	吹上遺跡出土遺物 (1)
図版 10	吹上遺跡出土遺物 (2)
図版 11	吹上遺跡出土石器
図版 12	吹上遺跡出土縄文土器

挿 図 目 次

第1図	遺跡分布図 ($\frac{1}{25000}$)	2
第2図	新婦遺跡周辺地形及び位置図 ($\frac{1}{2500}$)	3
第3図	S K 1 遺構実測図 ($\frac{1}{40}$)	4
第4図	S I 4 遺構実測図 ($\frac{1}{60}$)	5
第5図	S K 1 出土遺物実測図 ($\frac{1}{3}$)	6
第6図	S I 4 出土遺物実測図 ($\frac{1}{3}$)	7
第7図	新婦遺跡発掘調査風景	8
第8図	新婦・吹上遺跡遺構配置図 ($\frac{1}{100}$)	折込
第9図	吹上遺跡周辺地形及び位置図 ($\frac{1}{2500}$)	9
第10図	S B 10遺構実測図 ($\frac{1}{80}$)	10
第11図	S K 1 遺構実測図 ($\frac{1}{40}$)	11
第12図	S K 7 遺構実測図 ($\frac{1}{40}$)	11
第13図	吹上遺跡出土遺物実測図 ($\frac{1}{3}$)	13
第14図	吹上遺跡出土石器実測図 ($\frac{1}{2}$)	14
第15図	吹上遺跡出土縄文土器実測図 ($\frac{1}{3}$)	16

表 目 次

第1表	新婦・吹上遺跡周辺遺跡一覧表	1
-----	----------------	---

I はじめに

久留米市は筑後平野の中心に位置し、有明海沿岸の低地帯の一部をなす。気候は内陸性気候を示す。

ここに報告する2つの遺跡は、耳納山地西端に位置する高良山(312m)の麓に所在する。先ず、新婦遺跡は高良山扇状地下位面台地にのり、標高約12mを測る。北側には筑後川氾濫原を見下すことができる。次に、吹上遺跡は同扇状地上位面台地に位置し、標高は約26mである。段丘下位面を北西に望む。両遺跡ともに、これらの自然環境のもとに立地している。

また、両遺跡の周辺には旧石器時代から中世に至る各時期の遺跡が存在しており、下表のとおりである。

第1表 新婦・吹上遺跡周辺遺跡一覧表

№	遺 跡 名	所 在 地	時 代	内 容
3	西 屋 敷 遺 跡	合 川 町字西屋敷	旧石器～歴史	弥生甕棺墓群・中世土壙墓群
4	国 府 跡	〃 字ギャクシ他	奈良～平安	国衙建物群（第Ⅰ期国府）
5	朝 妻 遺 跡	御 井 町字朝妻	平安～鎌倉	〃 （第Ⅱ期国府）
6	下 見 遺 跡	東合川町字下見	奈良～鎌倉 江戸	集落跡
7	ヘボノ木遺跡	〃 字上ヘボノ木・下ヘボノ木	奈良～鎌倉	御井郡衙跡
8	神 道 遺 跡	〃 字神道1295他	縄文～弥生 奈良～平安	集落跡
9	御 堂 島 遺 跡	〃 字御堂島	奈良～平安	〃
10	安国寺甕棺墓群	山 川 町字池巡・西神代	旧石器・縄文 弥生～古墳	弥生甕棺墓群・祭祀遺跡
11	野 口 遺 跡	〃 字野口2801他	旧石器・縄文 歴史（鎌倉）	縄文前期生活跡・中世生活跡
12	大 島 遺 跡	〃 字大島1818-1	弥 生	溝・竪穴状遺構
13	於 黒 遺 跡	〃 字於黒1790-1他	平 安	掘立柱建物柱痕
14	南 本 村 遺 跡	〃 字南本村	弥生～古墳	散布地
15	二 本 木 遺 跡	御 井 町字二本木	弥生～鎌倉	集落跡
16	横 道 遺 跡	〃 字横道	縄文・歴史 (平安～鎌倉)	縄文竪穴状遺構 国衙建物群（第Ⅲ期国府）
17	福聚寺古墳群	合 川 町字福聚寺	古 墳	箱式石棺
18	打越古墳群	御 井 町字打越	古 墳	円墳(横穴式石室)・箱式石棺
19	祇園山古墳	〃 字高良山	古 墳	方墳・箱式石棺
20	礫 山 古 墳	〃 字礫山	古 墳	舟形磐棺4基
21	高良山神籠石	〃 字高良山	歴 史	総長1.6km 約300個の列石



第1図 遺跡分布図 (1/25000)

Ⅱ．新 婦 遺 跡

1．調査の経過と概要

本遺跡は、高良山の北麓から筑後川に向かって広がる低位段丘の縁辺で、国道 210号線の北側に位置し、福岡県久留米市山川町（字新婦）1387－1 に所在する。

当該地は、埋蔵文化財包蔵地の確認依頼を受けて試掘を行なった結果、わずかに遺構の残る部分が確認されたので、宅地造成に先立って発掘調査を実施した。

調査は対象地に東西16m・南北4.5mのトレンチを設定して、昭和57年8月18日から8月28日まで行なった。

調査の結果、土壌1基・竪穴住居跡1軒・ピット2個を検出し、弥生時代から古墳時代の複合遺跡であることが認められた。



第2図 新婦遺跡周辺地形及び位置図 (1/200)

2. 検出遺構と遺物

(1) 遺 構

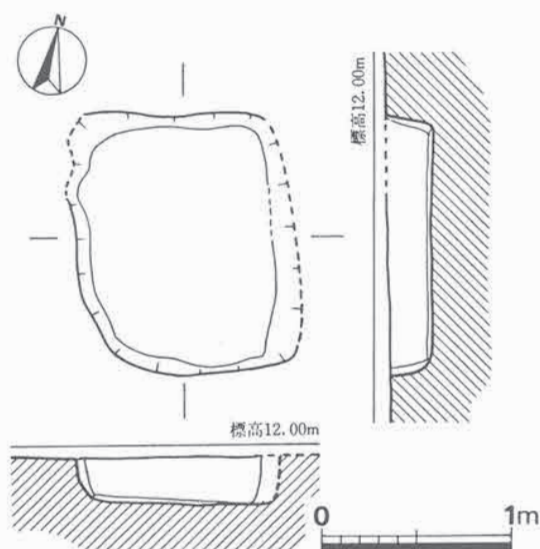
SK1 (図版1、第3図)

調査区の西端で検出した土壌で、東側を近世の湿抜きの溝によって切られている。土壌は隅丸方形で、一辺の長さは約1.4m・現存深さ30cmを測る。底面はフラットな面を呈し、壙底から弥生土器の甕や鉢が散乱した状態で出土した。

S14 (図版2・3、第4図)

調査区の東側に位置し、試掘において一部が検出された竪穴住居跡である。長辺4.5m・短辺3.8mを測る。平面プランは隅丸長方形を呈する。上面は削平を受け、現存壁高は約10cmである。中央部は攪乱されている為、床面の状態を窺うには困難を極めたが、ピット3個と土壌1基を検出することができた。北壁中央の土壌は、屋内貯蔵穴と考えられる。

床面からは若干の炭化物と土師器高杯・埴・甕が出土した。これらの遺物の出土地点は、北壁中央部と南西壁周辺の2カ所に大別でき、貼りついた状態を呈していた。



第3図 SK1遺構実測図(1/40)

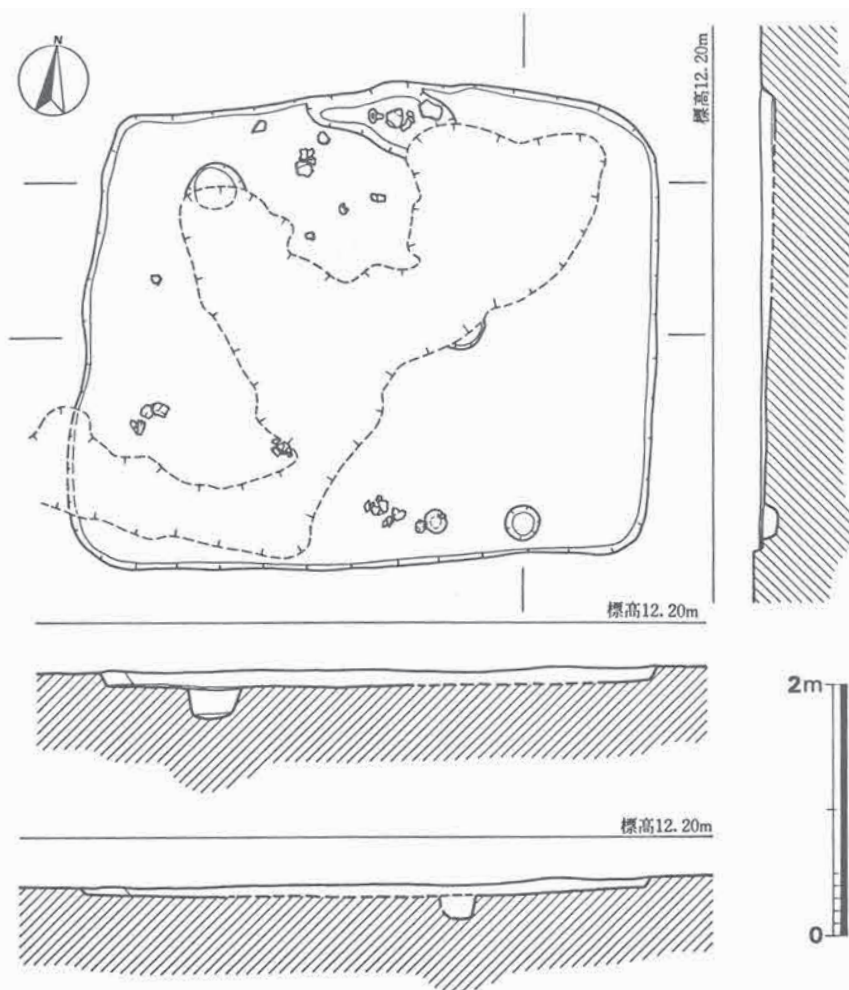
(2) 遺 物

SK1出土遺物 (図版4、第5図)

1は鉢形土器で、復原口径13.2cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は体部の延長上に位置する。外面の調整は縦方向のハケ目を、口縁部直下より施している。また、内面はナデ調整を行なう。

2は口径16.9~18.1cm・底径6.4cm・器高15.4~16.8cmを測る小形の甕である。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整で、外面体部は縦方向の細かいハケ目を施す。内面は丁寧にナデを行なう。胎土は粗く、焼成は良くない。暗茶褐色を呈する。

3は胴部上位に一条の貼り付け三角突帯を有し、不揃いの刻目を施した甕である。刻目は口縁端部にも認められる。口縁直下から胴部下位にかけて不明瞭な黒斑を付す。口径は22.6cmで胴部最大径ときほど変らない。底径8.2cm・器高23.7~26.3cmを測る。胎土は砂粒を多く含み、

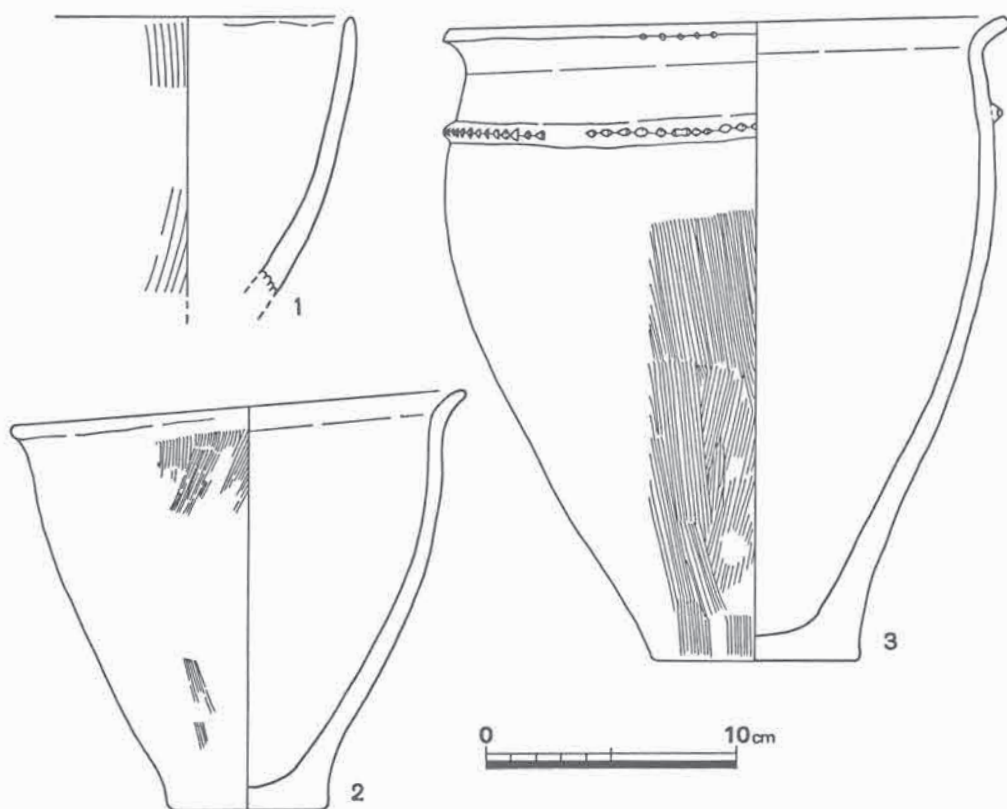


第4図 SI4遺構実測図(1/60)

焼成は良好。胴部下位に一部ススの付着が見られる。

SI4出土遺物 (図版4・5、第6図)

4～7は杯部と脚部が、それぞれ分かれて出土した高杯である。4は杯・脚部が接合したもので、杯部はやや内湾気味に立ち上がり、体部下位に有する稜を境に、口縁にかけて外反しながら開く。内底部及び外面の稜直上にはハケ目調整後、丁寧になデを行ない器面を整えている。脚部は裾部で大きく外へ開いている。内面にはヘラ状器具を回転させながら粘土を掻き取った跡が窺える。外面の調整は、縦方向にヘラケズリを行なった後、丁寧なナデを施す。5は杯部のみで、体部下位にはシャープな稜は有せず、緩やかに立ち上がる。器面の調整及び法量は4と変わらない。6・7は脚部で、裾端部径は11.2・12.9cmと差異は認められるが、内面及び外面



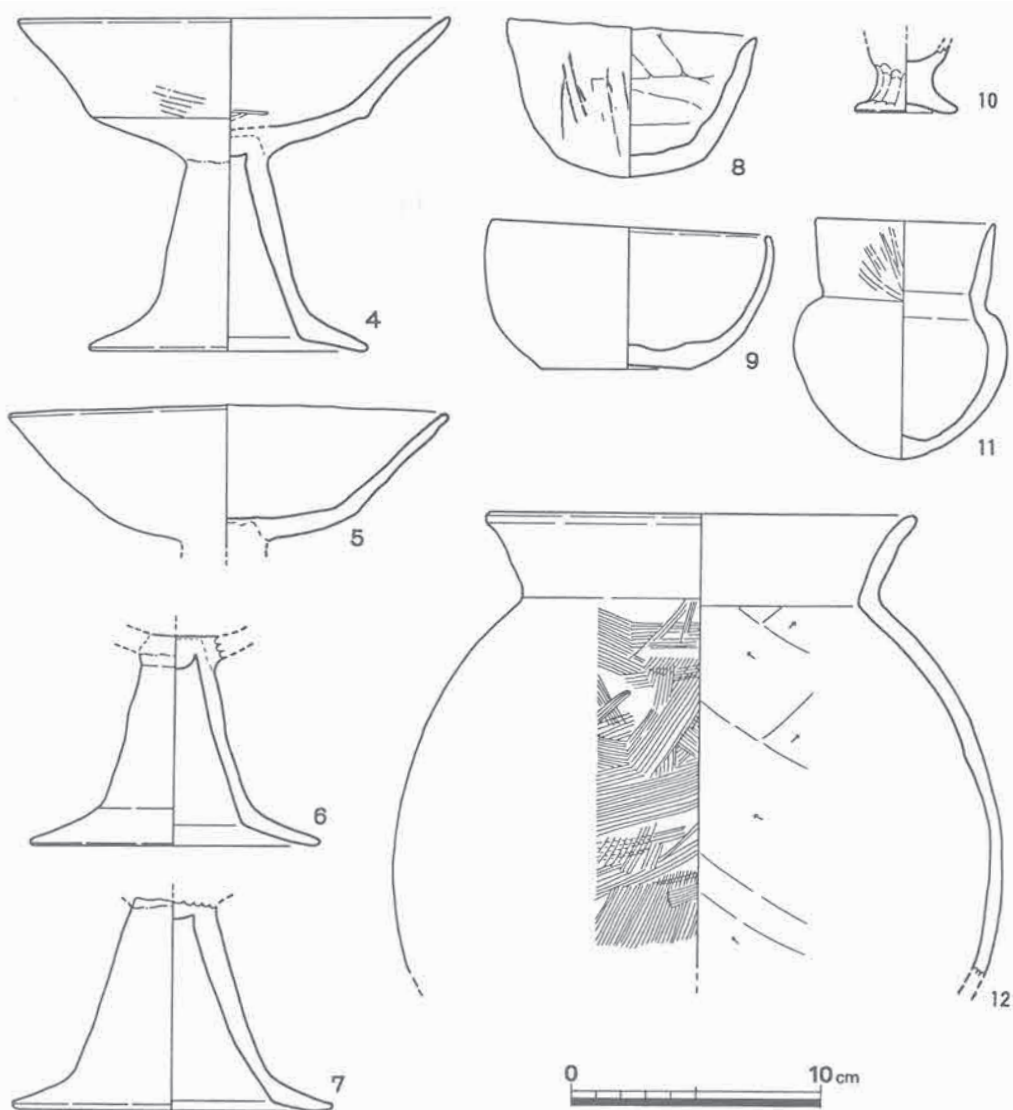
第5図 SK I 出土遺物実測図 (1/3)

の調整は4と同様である。両方ともに焼成は良好で、淡黄褐色を呈する。

8・9は椀形土器である。8は丸底を呈し、体部は縦方向にヘラケズリを行なった後、ヨコナデを施す。底部は指ナデを不定方向に行なっている。内面口縁下には指頭圧痕が残し、体部はヨコナデ調整である。9は平底で、体部に丸味を持たせている。口縁部はやや内湾する。外面は丁寧なナデを施すが、内面はヘラケズリ後ナデを行なう。口径11.2cm・底径6cmで、器高5.4～6cmを測る。

10は手づくねのミニチュア土器である。体部上半は欠損している為、器形は判然としない。器面全体に幾度も押えた指頭圧痕が顕著に残る。

11は丸底の埴で、頸部は縦方向のヘラケズリ後ナデ、胴部は横方向のヘラケズリの後ナデ調整を行なう。内面は雑なヨコナデである。口径7.2cm・胴部最大径8.6cm・器高9.7cmを測る。胎土・焼成ともに良好で、暗茶褐色を呈する。



第6図 S I 4 出土遺物実測図 (1/3)

12は「く」の字形口縁を呈する甕で、口縁は内外面にヨコナデを行なう。胴部は不定方向のハケ目調整で、内面は不定方向のヘラケズリをしている。胴部に広く黒斑を有し、胴部下位にススが付着する。5mm大の長石や砂粒を多く含む。暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。復原口径17.2cmを測る。

3. ま と め

本遺跡は、高良山北麓の低位段丘の縁端部に位置し、半径600mの中に大島遺跡（弥生時代）^{註1}、
於黒遺跡（平安時代）^{註2}、南本村遺跡（弥生～古墳時代）^{註3}などが分布している。しかし、本調査
において検出した遺構は、土壇1基・竪穴住居跡1軒・ピット2個と、数少なかったが、新婦
遺跡として一人歩きできるだけの成果を得た。

弥生時代の土壇の性格は今一つ判然としない。出土した遺物を観察すると、先述した大島遺
跡出土の甕形土器と同一型式であることから、弥生時代前期の時期が与えられよう。

竪穴住居跡は攪乱を受け、柱穴及び床面の状態が不明であるが、高杯・埴・甕などの遺物か
ら、古墳時代中期と考えられる。本遺跡付近において、古墳時代の竪穴住居跡の検出類例は非
常に乏しいものであったが、本調査により住居跡とこれに伴う土師器が出土し、セット関係を
把握できたのは大きな意義であった。

これまでは、本遺跡近辺が近世以降の開墾でほとんど消滅したと考えられていたが、以上の
ように本遺跡が、弥生・古墳時代の複合遺跡であると判明したことにより、今後の調査の成果
を俟ち、近辺の遺跡との関連性を点から線、次に面へと追って行くことで、当時の生活空間の
足跡を窺えるものとする。本調査は今後の調査の進展に一助を与えるものである。

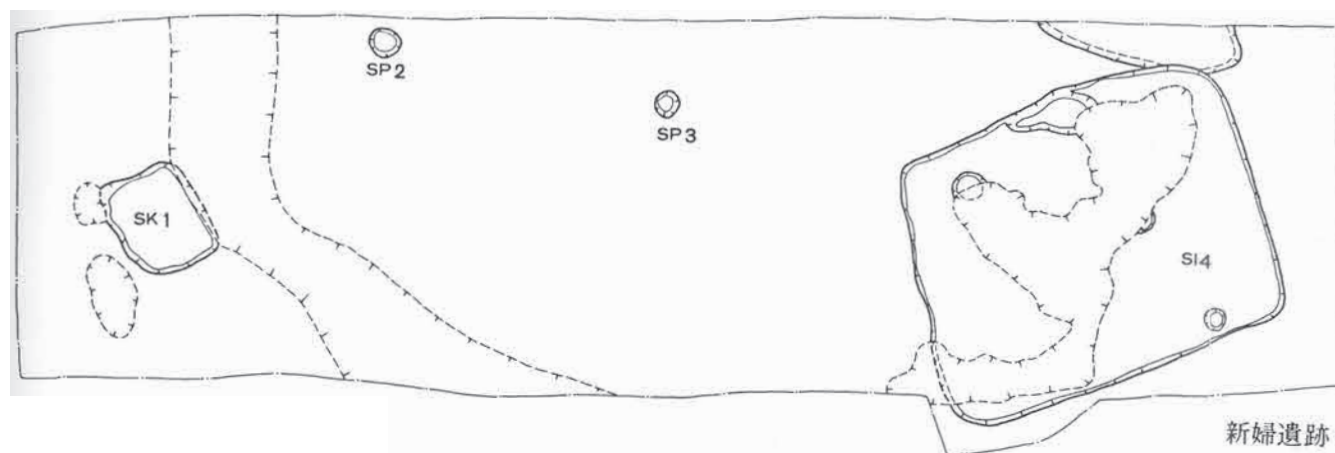
註1 溝中から弥生前期後葉に属する甕形・壺形土器が出土している。（参考文献21参照）

註2 条里調査において平安時代中頃の生活地が確認されている。（参考文献15参照）

註3 福岡県遺跡等分布地図、遺跡番号030323、散布地。（参考文献23参照）

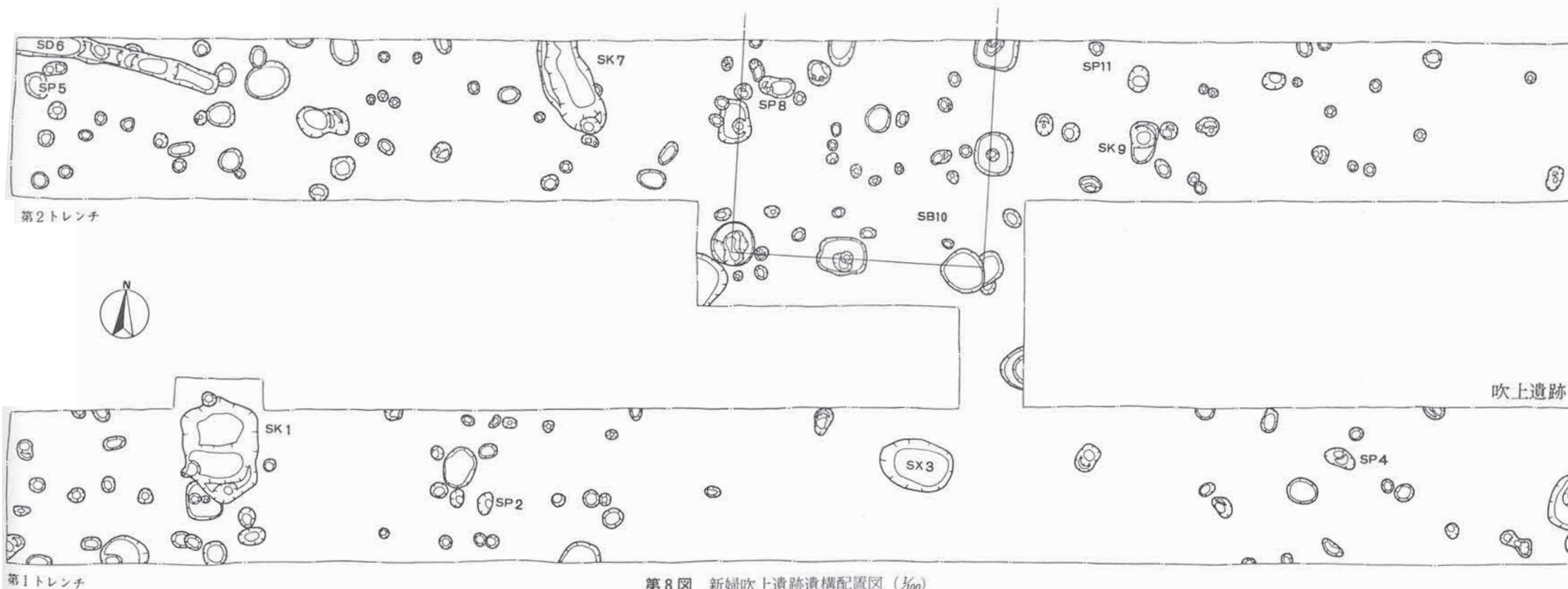


第7図 新婦遺跡発掘調査風景



新婦遺跡

0 5m



吹上遺跡

第8図 新婦吹上遺跡遺構配置図 (1/100)

Ⅲ. 吹 上 遺 跡

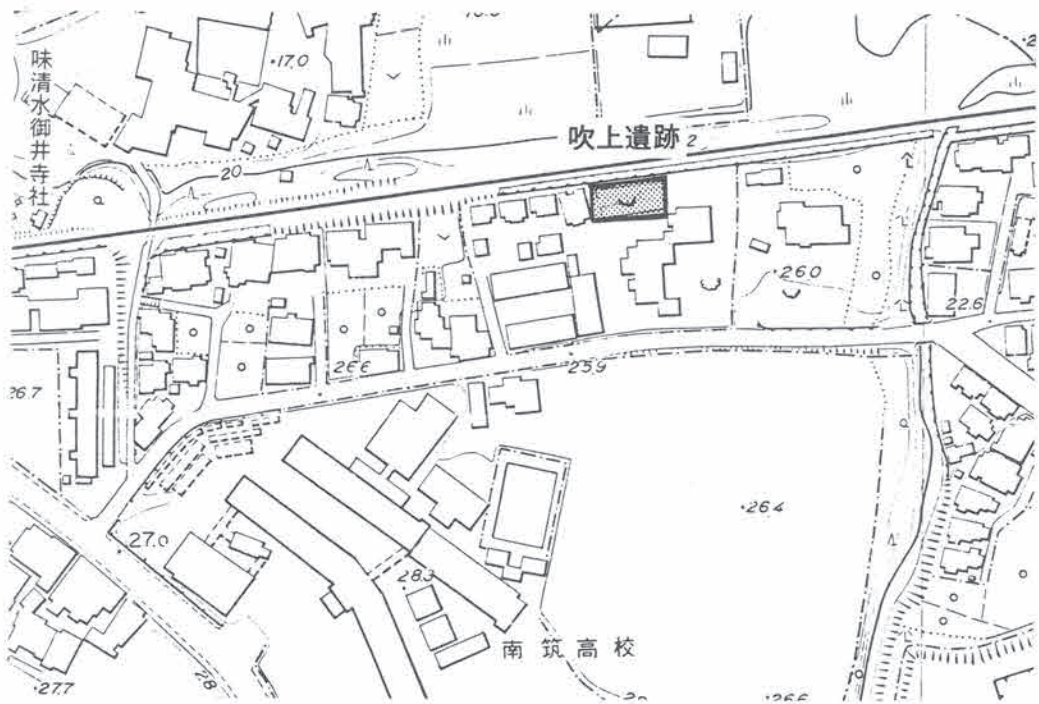
1. 調査の経過と概要

本遺跡は久留米市御井町字吹上1338-1に所在し、市立南筑高校グラウンドと久大本線の間に位置する。ここは標高26mの中位段丘の北辺部にあたり、南隣の同校校庭には横道遺跡が知られる。同遺跡は昭和50・52・54・60年の5次にわたる調査によって、縄文時代早期の遺構・遺物が検出されている。また、平安時代中期～鎌倉時代の掘立柱建物群等の検出から、第Ⅲ期筑後国衙跡と考えられている。

本調査は横道遺跡と一連の遺跡の存在が予想されるため、共同住宅建設に先立って、昭和57年10月12日から10月25日まで実施した。

調査は、対象地に幅3m×長さ29.5mの東西に長いトレンチを2本設定して行ない、必要に応じて拡張区を設けた。

調査の結果、掘立柱建物跡・土塼・溝状遺構・ピット群が検出された。また、遺物は縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器などが出土し、横道遺跡出土遺物と同時期のものが認められた。



第9図 吹上遺跡周辺地形及び位置図 (1/2500)

2. 検出遺構と遺物

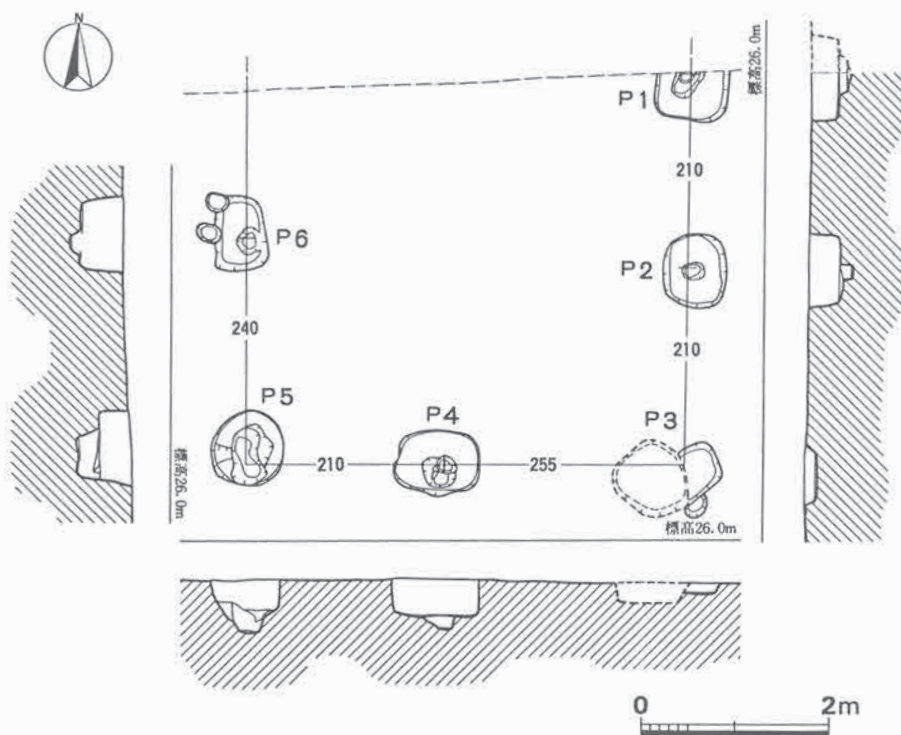
ここでは検出した遺構の中から、主要と思われる遺構を抜き出し、また、遺物においては遺構毎ではなく遺跡単位として扱えるものをセレクトした。

(1) 遺 構

SB10 (図版7、第10図)

第2トレンチ中央部で検出した南北棟と思われる掘立柱建物である。

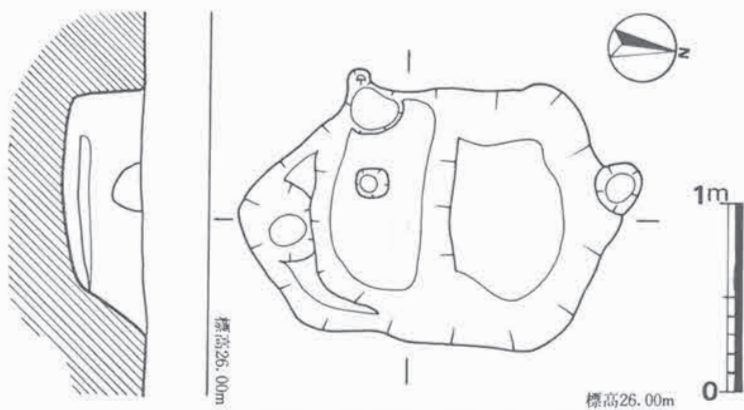
規模は東西2間(4.8m)・南北2間(4.65m)以上である。柱間寸法は東柱列が7尺等間に対し、西柱列は1間のみの検出であるが8尺を測る。なお、南柱列は7尺・8.5尺と不揃いである。柱穴の掘り方は、一辺60~90cm隅丸方形あるいは円形を呈し、現存深さは50~60cmを測る。しかし、P3のみ10cmと浅い。主軸方位はほぼ磁北を示す。柱穴3ヶ所から、土師器の杯・小皿・黒色土器碗が出土している。



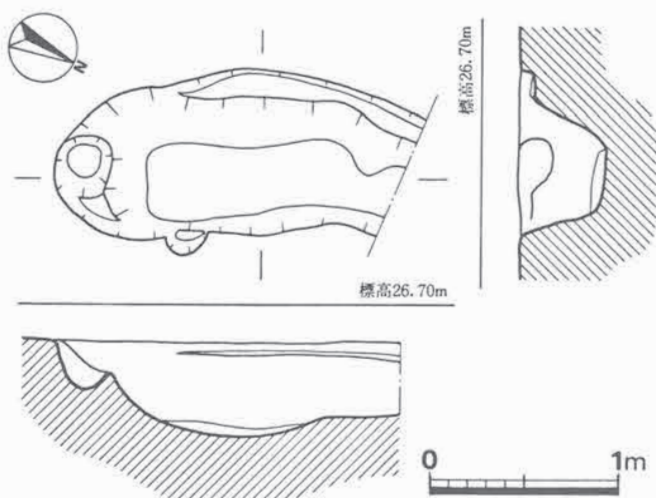
第10図 SB10遺構実測図 (1/80)

SK1 (図版8、第11図)

第1トレンチ西側で検出した土壌である。長軸2m・短軸1.2mで、現存深さ45cmを測る。



第11図 SK1 遺構実測図 (1/40)



第12図 SK7 遺構実測図 (1/40)

不整六角形状プランを呈する。底面は北側に段を有し、南側が深くなる。遺物は土師器の小皿・杯、須恵器の杯・甕片等が出土した。12世紀前半の遺構と思われるが、性格は判然としない。

SK7 (第12図)

第2トレンチのSB10の西側で検出したが、全体のプランを確認するに至らなかった。幅70～90cm・現存深さ22～50cmを測る。溝状遺構の可能性もあるが北壁を検出していない為、土壌として扱った。出土遺物は少なく時期決定は不可能と思われる。

SD6

第2トレンチ北西隅で検出した東西走向の溝である。総長3.8mまで確認した。西へ延びると考えられる。

幅35～40cm、現存深さ14～

48cmを測り、溝底面のレベルにかなりの差が認められる。溝の土層は上面から溝底まで同一の埋土であり、一括に埋まったことを示している。埋土中から土師器の小皿(糸切り底)・杯・瓦器碗片が出土している。このことから、12世紀前半の遺構と考えられる。

SX3

長軸1.4m・短軸1m・現存深さ25cmを測る楕円形プランの土壌である。底部は擂鉢状をな

す。第1トレンチ中央部で検出した。埋土は茶褐色を呈し、縄文時代早期の遺物が出土した。

(2) 遺物 (図版9・10、第13図)

1～4は土師器の小皿で、1・2はヘラ切り底、3・4は糸切り底を呈する。

1はSP 4から出土した。口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、底部はやや丸味をもつ。内面と外面体部はナデを行なう。口径9cm・底径7.6cm・器高1cmを測る。胎土・焼成ともに良好で、乳褐色を呈す。2は口径9.9cm・底径7.6cm・器高1～1.3cmを測る。雑な整形を行なう。内底中央部に高まりを有し、その周りには浅く、広い幅の沈線がめぐる。底部には板目圧痕が残り、ヘラ切りの方向は時計回りである。3はSP 8出土で口径8.4cm・底径6.2cm・器高0.8～0.95cmを測る小皿である。器面の剥落が著しい為、調整は判然としないが、シャープな器形を成している。黄褐色を呈し、焼きはややあまい。4は若干上げ底になり、板目圧痕が認められる。内底部に1条の凹線が入り、中央部に至っては不定方向のナデ調整を行なう。体部から口縁は内外面ともにナデ。体部はやや外反気味な立ち上がりを見せる。口径9.6cm・底径6.8cm・器高1.3cmを測る。乳白色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

5・7・8はヘラ切りの底部を有する土師器の杯で、6は須恵器の杯である。

5は包含層より出土したもので、底部の切り離しは角度を変えてヘラを差し込んでいる為、底部に段がついている。内底中央部は不定方向のナデを施し、体部は内外面ともにヨコナデ調整を行なう。体部は大きく開き、口径11.8cm・底径7.3cm・器高2.3cmを測る。赤褐色を呈し、胎土・焼成も良好である。6・7はSK 1から出土したものである。両者とも体部は直線的に立ち上がり、丁寧なヨコナデ調整を行なっている。前者は口径13.2cm・底径7.8cm・器高3.5cmを測り、後者は口径13.1cm・底径8.3cm・器高3.1cmを測る。ヘラ切りの方向は両者ともに時計回りである。8は包含層より出土し、底部の中央がかなり薄手に作られている。体部中位の屈折は調整器具が偶然に触れた際に出来たものと考えられる。口径14cm・底径9cm・器高3.3cmを測る。胎土は精良であるが、焼成はややあまい。乳灰色を呈する。

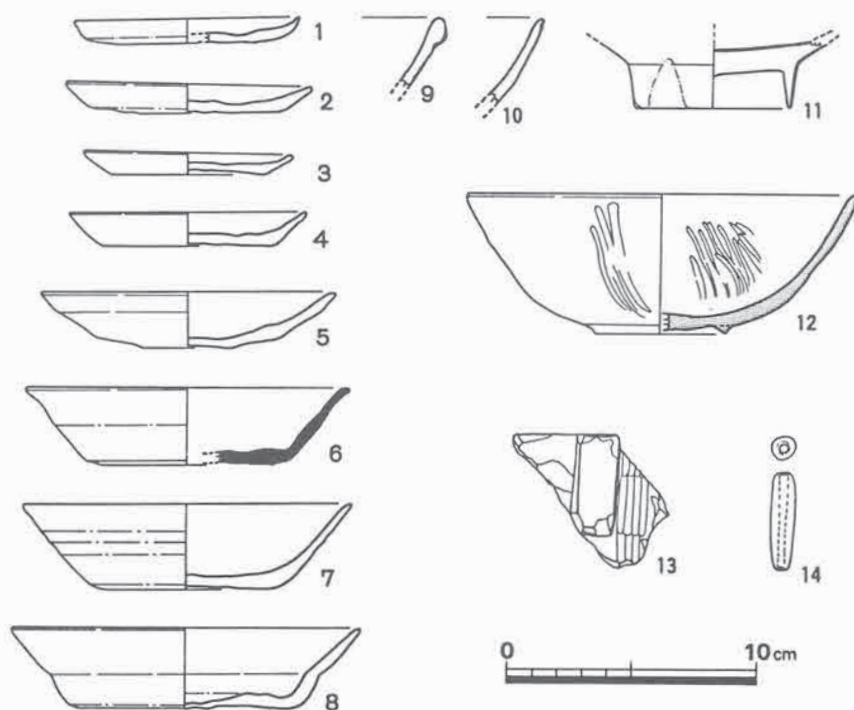
9～11は白磁片である。

9は玉縁の口縁を持つものである。体部上位から底部までを欠損しているが、浅い削り出しの高台を有するものと思われる。釉薬は灰白色の釉で、玉縁部には釉ダレが認められる。胎土は白色で、黒い細粒子が混じる。10はSP 8より出土したものである。体部の器肉は薄く、口縁下までヘラ削りを行ない若干丸味をつけている。口縁端部はやや外反させ丸く整えている。底部を欠いた資料であるが、細く高い直立した高台を有するものと考えられる。うすく乳白色の釉を施す。胎土は灰白色を呈する。11はSP 2から出土した底部片で、細く高く直立した削り出しの高台を有する。内面及び外面には厚く釉薬をかけている。外面は高台と体部の境まで施釉しているが、高台部から畳付に至り釉ダレが認められる。内面は緑白色で、外面は黄白色を呈す。高台の径6.2cm・高さ1.8cmを測る。

12は包含層から出土した瓦器碗である。底径 6.1cmと小さく低い高台を持ち、体部下位で屈曲して、大きく開いた口縁を有する。内外面ともにナデ後ミガキを行なう。高台は三角形を呈す。口径15.6cm・器高 5.6cmを測る。胎土は精良で淡灰色、焼成は良好である。

13は滑石製の石鍋である。外面は縦方向の細かいケズリを行ない、内面は粗いケズリをしている。把手は復原すると縦 4cm・横 1.9cm・厚さ 0.9cmを測ると思われ、4個の把手を有していたと考えられる。外面にはススの付着が認められる。

14は長さ 3.9cm・幅 1cm・厚さ 0.9cmの完形の土錘である。径 3～4mmの穴が貫通している。細身の小形品の範ちゅうに入ると思われる。黒茶色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。



第13図 吹上遺跡出土遺物実測図 (1/3)

石 器 (図版11、第14図)

石器は、石鏃・搔器・削器・二次加工石器・使用剥片・石核等が認められている。

石材は、削器のみ石英製で他は総て黒曜石である。

石鏃 (1)

二次加工は両面とも全面に及んでいる。基部はわずかに抉りがみられるが、ほぼ直線的である。最大長 2.3cm・最大幅 1.6cm・最大厚 0.6cmを測る。

搔器 (2)

欠損しているが比較的小形のものであると推定される。整った二次加工により端部に刃部を作り出している。残存最大厚0.7cm。

削器 (3)

不定形剥片の石英を素材とした削器である。両面とも入念な二次加工がおこなわれており、一部一次加工面を残している。刃部は両側辺及び端部に作られている。石材選択の点で興味深い資料である。最大長 4.7cm・最大幅 3.3cm・最大厚 1.1cm。

二次加工石器 (4・5)

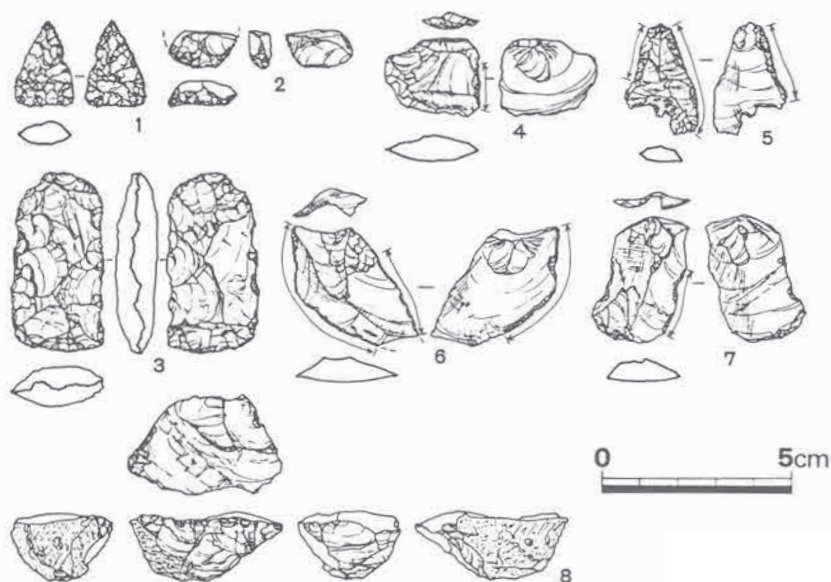
4は、横長剥片を素材とし、裏面には加工がみられずバルブを残している。表面の側辺に細かい二次加工が入念に行なわれている。最大長 2.0cm・最大幅 2.4cm・最大厚 0.7cm。5は縦長剥片を素材とし、表裏両面から二次加工が行なわれている。自然面を残す。最大長 3.0cm・最大幅 1.8cm・最大厚 0.5cmを測る。

使用剥片 (6・7)

6は、両側辺及び打面の一部に刃こぼれが認められる。最大長 3.2cm・最大幅 2.7cm・最大厚 1.2cm。7は、縦長剥片を素材としており、打点を削除されている。一側辺に細部加工と刃こぼれが認められる。最大長 3.4cm・最大幅 2.0cm・最大厚 0.6cm。

石核 (8)

厚味のある剥片を素材とし、その主要剥離面を打面にしている。側面は調整が施こされており、特に打面縁調整が顕著である。一部自然面を残す。



第14図 吹上遺跡出土石器実測図 (1/2)

縄文土器 (図版12、第15図)

縄文土器は早期・前期・晩期のものが認められ、特に早期の押型文が大半を占めている。

1～16は押型文土器で、17・18は粗製土器である。

1・2は器外面に山形文を施文する。2点とも胴部に鋸歯状の山形文が横走施文されており、ほぼ直角の山形で、鮮明な文様である。1は波長0.6cm・振幅0.6cmを測り、砂粒を多く含む。暗茶褐色を呈する。2は波長0.4cm・振幅0.5cmを測り、細かい砂粒を含み、明黄褐色を呈する。

3～12は外面に楕円文を有し、口縁内面には施文有無と文様によって3種に細分できる。

(1) 外面楕円文・内面原体条痕＋楕円文を有するもの(3・4)

3は楕円の大きさ長軸0.6cm×短軸0.65cmを外面及び内面に施文する。また同一原体によって、口唇端部にも横走施文されている。内面の原体条痕はやや斜めに直線的に擦過されている。4は同一原体の長楕円文を器内外面に施文す。長軸0.7cm 短軸0.2cmを測る楕円文で、横位走向の施文である。原体条痕は細く直線的に斜走する。

(2) 外面楕円・内面原体条痕文を有するもの(5・6)

5は長軸1.1～1.3cm・短軸0.9～1.1cmの粗大な楕円文を外面に横走施文されている。内面口縁直下には縦位の原体条痕文が1.8cmの長さで入り、それに直角に交わるように原体条痕が横走する。口唇部にも同一原体による施文が認められる。6は外面にやや斜走する楕円文を施文したもので、楕円文の大きさは長軸0.8cm・短軸0.45～0.5cmを測る。内面の原体条痕はやや斜めに擦過されている。

(3) 外面楕円文・内面無文のもの(7～12)

7～12の外面楕円形状は長軸0.7～1.2cm・短軸0.55～0.9cmの大きさを示す。このうち、縦走施文させられたもの(8～11)、斜走施文のもの(7・12)が認知できる。口縁部をわずかに残す8を除くと総て胴部の資料である。楕円文の大きさ及び施文の明瞭さに差違がみられるのと同様に器肉の厚さにも種々の違いがみられる。

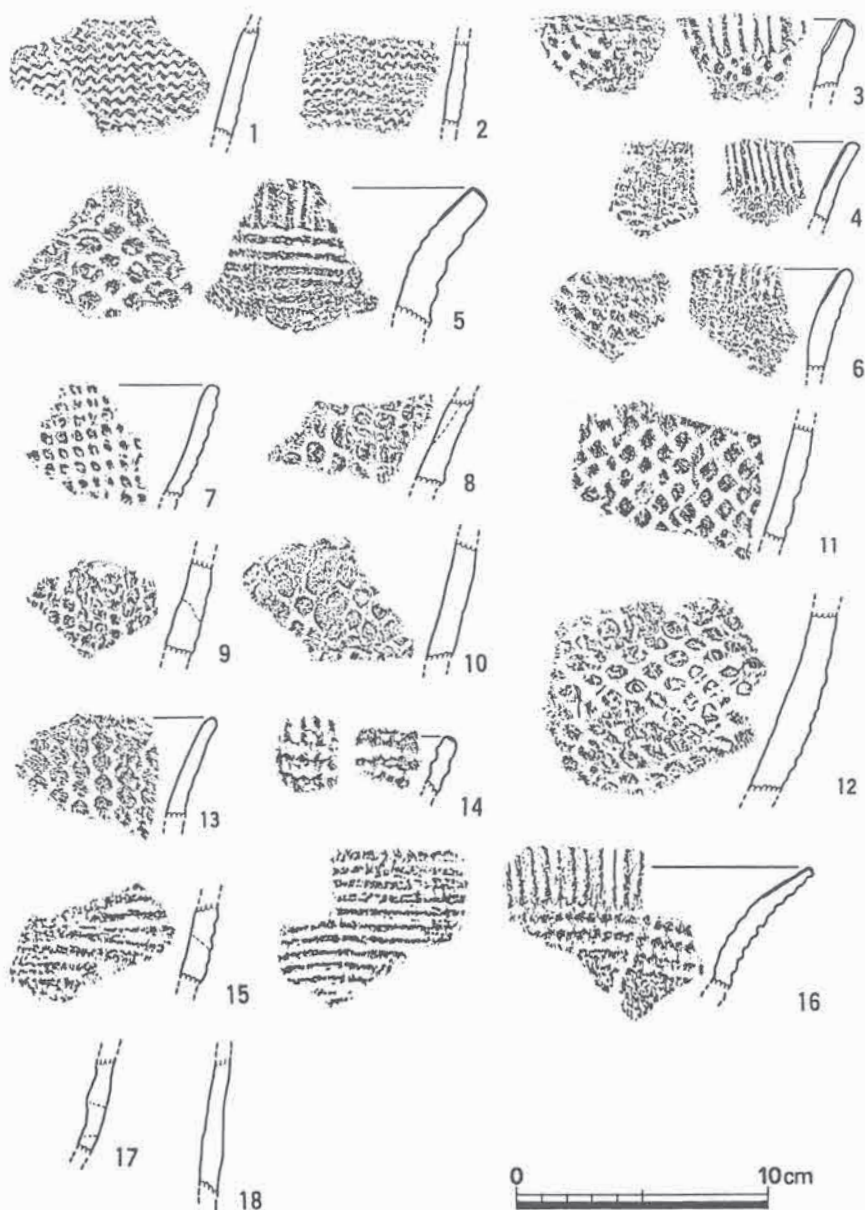
13・14は算盤玉状の楕円が連続した文様を構成したもので、いわゆる連珠文である。13は縦走回転による施文で、口縁直下より刻まれている。文様形状は楕円より菱形に近い。内面は無文を呈する。14は内外面ともにやや引きずりながら横走させる施文法をとったものである。口唇部も内外面の施文された同一原体による擦過状の刻みが認められる。

15・16は、胴部外面に原体条痕を横位に擦過させたものである。15は外面のみの施文であるが、16は外面及び内面口縁直下と口唇部に施文している。外面の横走に対し内面は縦走させ、その下位には横走の連珠文が認められる。これらは同一原体によるものと思われる。

17は内面及び外面に横走させた貝殻条痕を地文として施したものである。胎土には長石・金

雲母などの砂粒を含む。前期の粗製土器と思われる。

18は胴部片で、外面は粗いナデ、内面は丁寧なナデを施したものである。砂粒を多く含み、中でも角閃石が目立って多い。晩期の粗製土器と考えられる。



第15図 吹上遺跡出土縄文土器実測図 (1/2)

3. ま と め

本調査の結果、縄文時代と歴史時代の遺構が検出された。しかし、遺構に伴う遺物の出土が極めて少なかったことは、遺構相互の関連性及び性格、時期決定に困難を来した。

縄文時代の遺物には早期から晩期に至るものが含まれる。早期の押型文土器はほぼ9割を占め、山形文・楕円文・原体条痕文で構成している。遺構は土壇1基の検出にとどまった。

歴史時代の遺構は、掘立柱建物・溝・土壇がある。掘立柱建物は2間×2間以上の南北棟と考えられ、主軸を磁北にとることから、第Ⅲ期の筑後国府関連の建物と推定できる。

本遺跡は、高良山の中位段丘の北辺部に位置し、縄文・歴史時代ともに段丘の縁辺まで、遺構の広がりを検出できたことにより、同一プレートに乗る横道遺跡の北限と思われ、且つ同様な性格を有する遺跡と考えられる。

参 考 文 献

- 文献1 久留米市教育委員会『西屋敷遺跡』久留米市文化財調査報告書 第35集 1983
- 文献2 久留米市教育委員会『西屋敷遺跡Ⅱ』久留米市文化財調査報告書 第40集 1984
- 文献3 久留米市教育委員会『筑後国府跡(1)』久留米市文化財調査報告書 第12集 1976
- 文献4 久留米市教育委員会『筑後国府跡(Ⅱ)』久留米市文化財調査報告書 第13集 1977
- 文献5 久留米市教育委員会『筑後国府跡―昭和51・52・53年度発掘調査概報―』久留米市文化財調査報告書 第20集 1979
- 文献6 久留米市教育委員会『筑後国府跡―昭和54年度発掘調査概報―』久留米市文化財調査報告書 第23集 1980
- 文献7 久留米市教育委員会『筑後国府跡―昭和55年度発掘調査概報―』久留米市文化財調査報告書 第26集 1981
- 文献8 久留米市教育委員会『筑後国府跡・国分寺跡―昭和56年度発掘調査概報―』久留米市文化財調査報告書 第33集 1982
- 文献9 松村一良「筑後国府の調査」『古代文化』第35巻第7号 1983
- 文献10 久留米市教育委員会『筑後国府跡・国分寺跡―昭和57・58年度発掘調査概要報告―』久留米市文化財調査報告書 第41集 1984
- 文献11 久留米市教育委員会『筑後国府跡・国分寺跡―昭和59年度発掘調査概要報告―』久留米市文化財調査報告書 第44集 1985

- 文献12 久留米市教育委員会『昭和53年度東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査概報』久留米市文化財調査報告書 第21集 1979
- 文献13 久留米市教育委員会『昭和54年度東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査概要』久留米市文化財調査報告書 第25集 1980
- 文献14 久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書 第1集』久留米市文化財調査報告書 第29集 1981
- 文献15 久留米市教育委員会『昭和56年度東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査概報』久留米市文化財調査報告書 第32集 1982
- 文献16 久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書 第2集』久留米市文化財調査報告書 第36集 1983
- 文献17 久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書 第3集』久留米市文化財調査報告書 第39集 1984
- 文献18 久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書 第4集』久留米市文化財調査報告書 第43集 1985
- 文献19 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化調査報告』X V 1977
- 文献20 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』I 1970
- 文献21 久留米市教育委員会『久留米東バイパス関係埋蔵文化財調査報告』久留米市文化財調査報告書 第28集 1981
- 文献22 久留米市教育委員会『史跡高良山神籠石保存管理計画策定報告書』久留米市文化財調査報告書 第15集 1977
- 文献23 福岡県教育委員会『福岡県遺跡等分布地図』（久留米市・小郡市・三井郡編） 1979

圖 版



(1) 新給遺跡調査区全景 (東から)



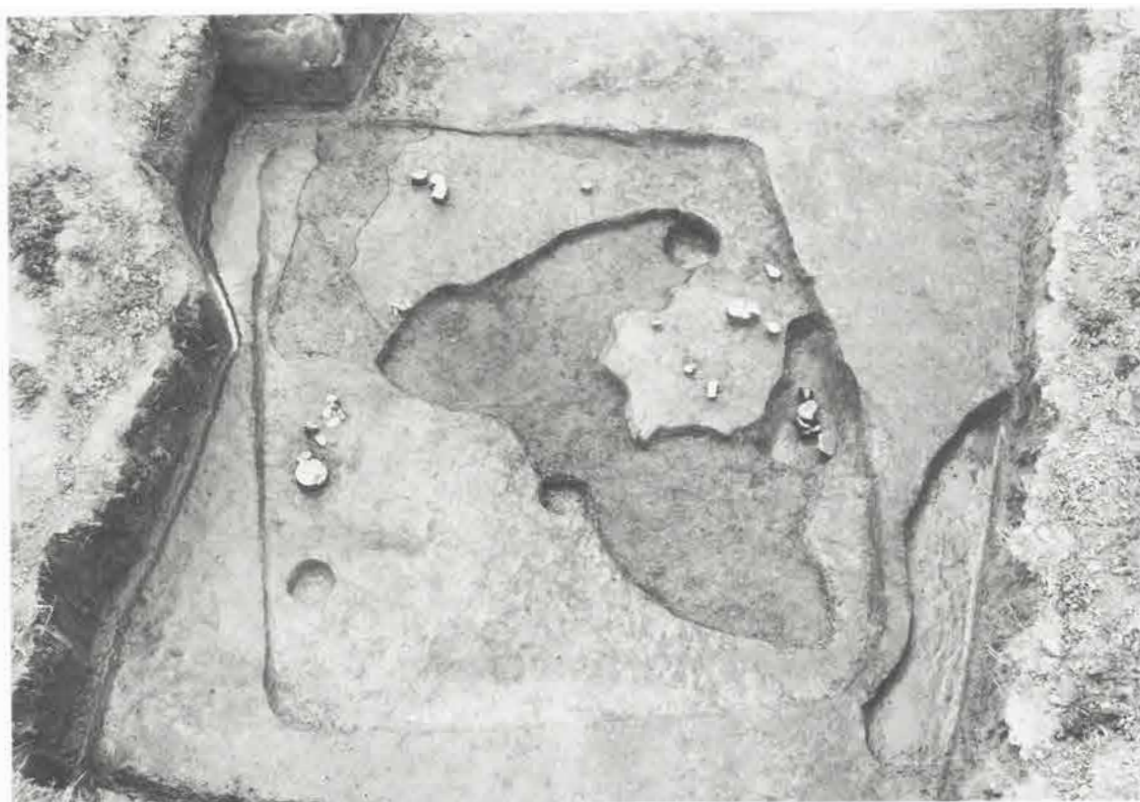
(2) SK 1 遺物出土状態 (東から)



(3) SK 1 (東から)



(1) SI 4 (東から)



(2) SI 4 (東から)



(1) SI 4 南壁付近遺物出土状態 (北東から)



(3) SI 4 西壁付近遺物出土状態 (南から)



(2) SI 4 南壁付近遺物出土状態 (北から)



(4) SI 4 貯蔵穴内遺物出土状態 (北から)

図版4



(1) SK 1 出土遺物



(2) SI 4 出土遺物(1)



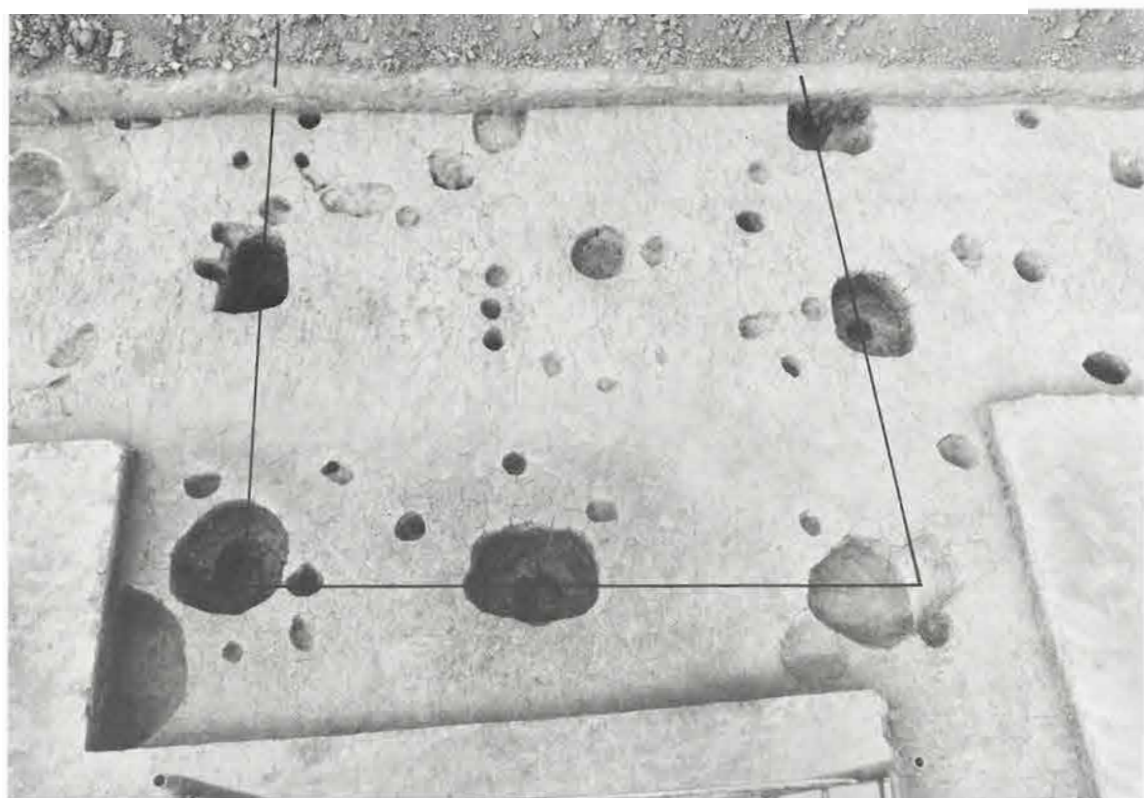
SI 4 出土遺物 (2)



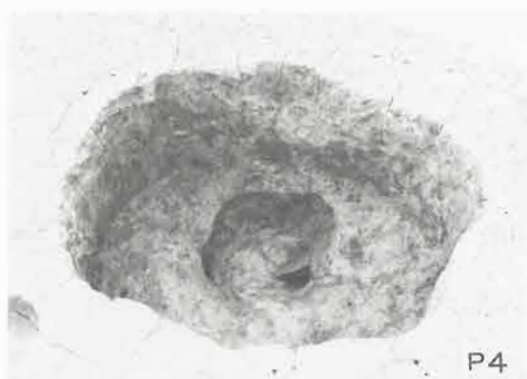
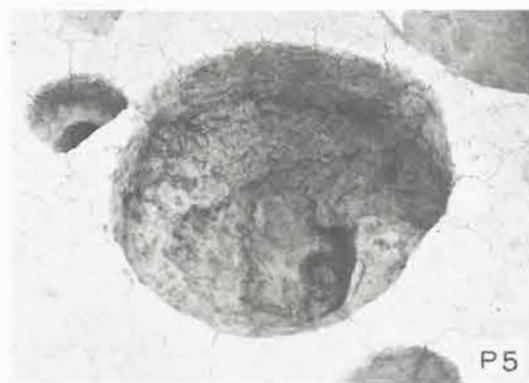
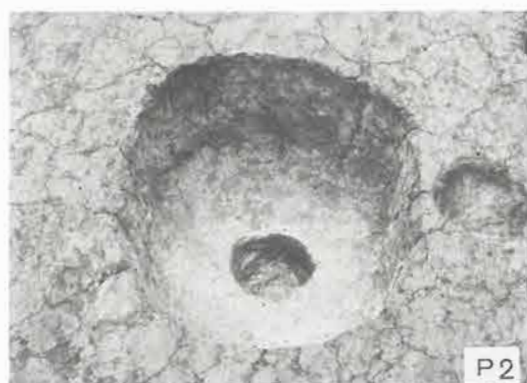
(1) 吹上遺跡調査区全景 (東から)



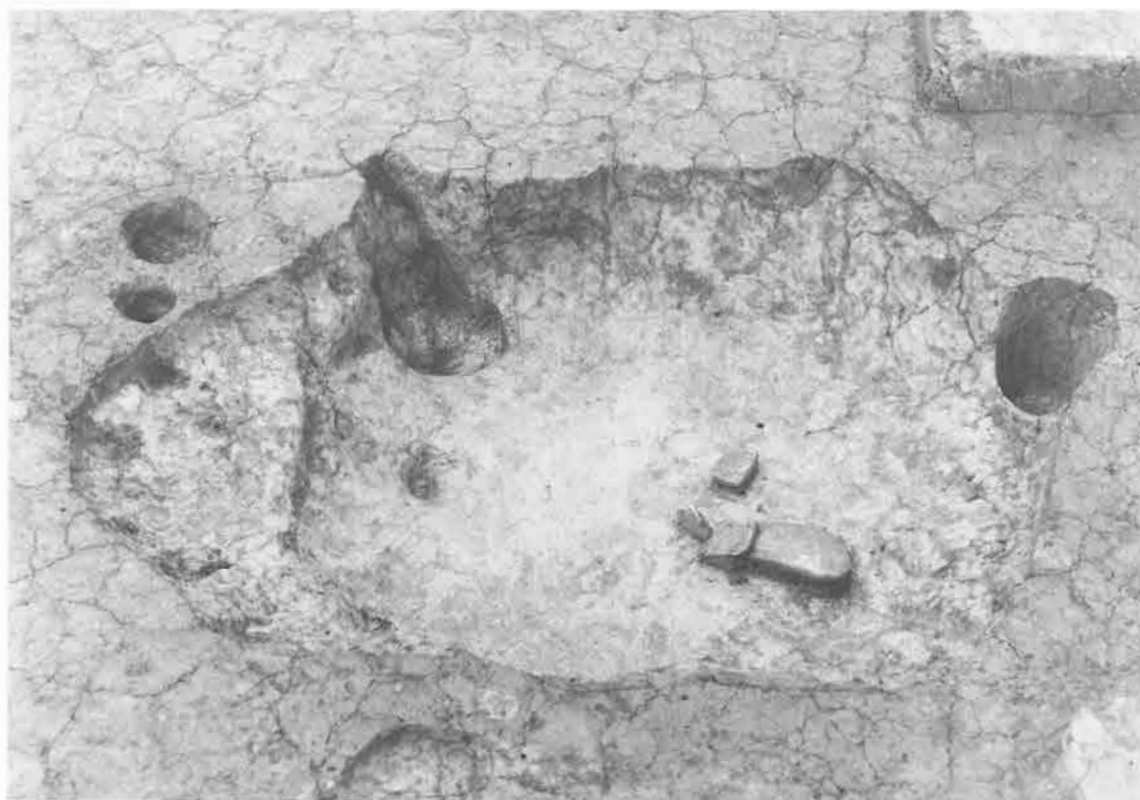
(2) 吹上遺跡調査区西半部 (南から)



(1) SB10 (南から)



(2) SB10柱穴掘方



(1) SK 1 (東から)



(2) SK 1 (北から)



1



2



3



4



5



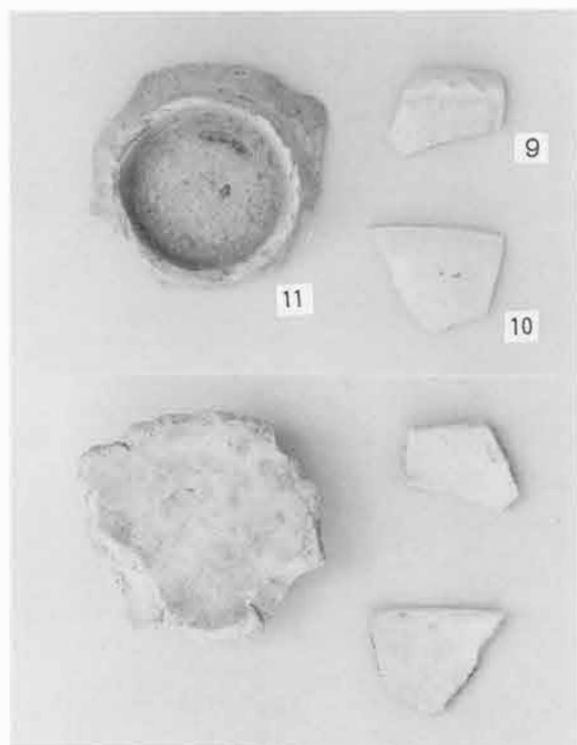
6



7



8

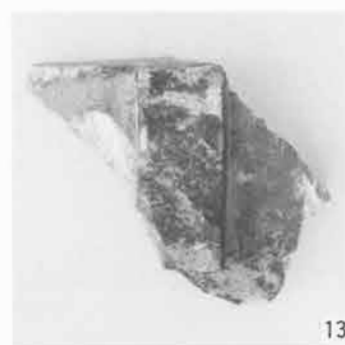


9

11

10

12



13

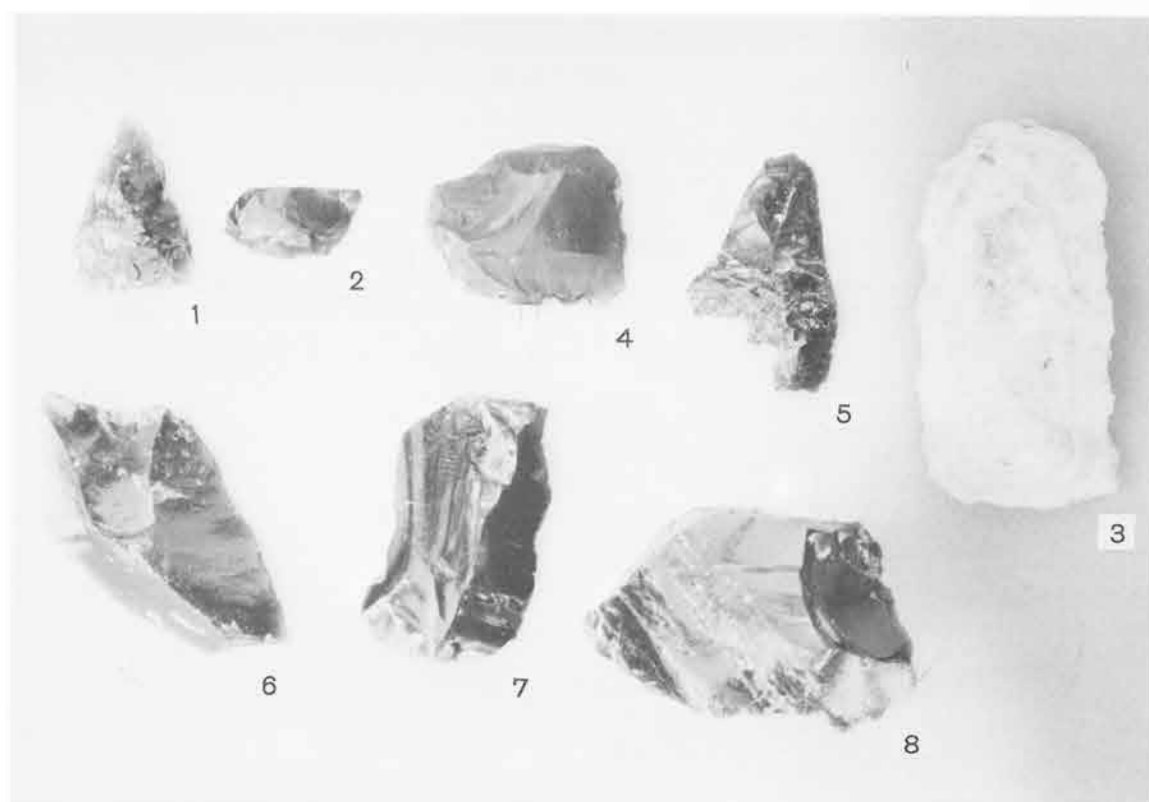


14

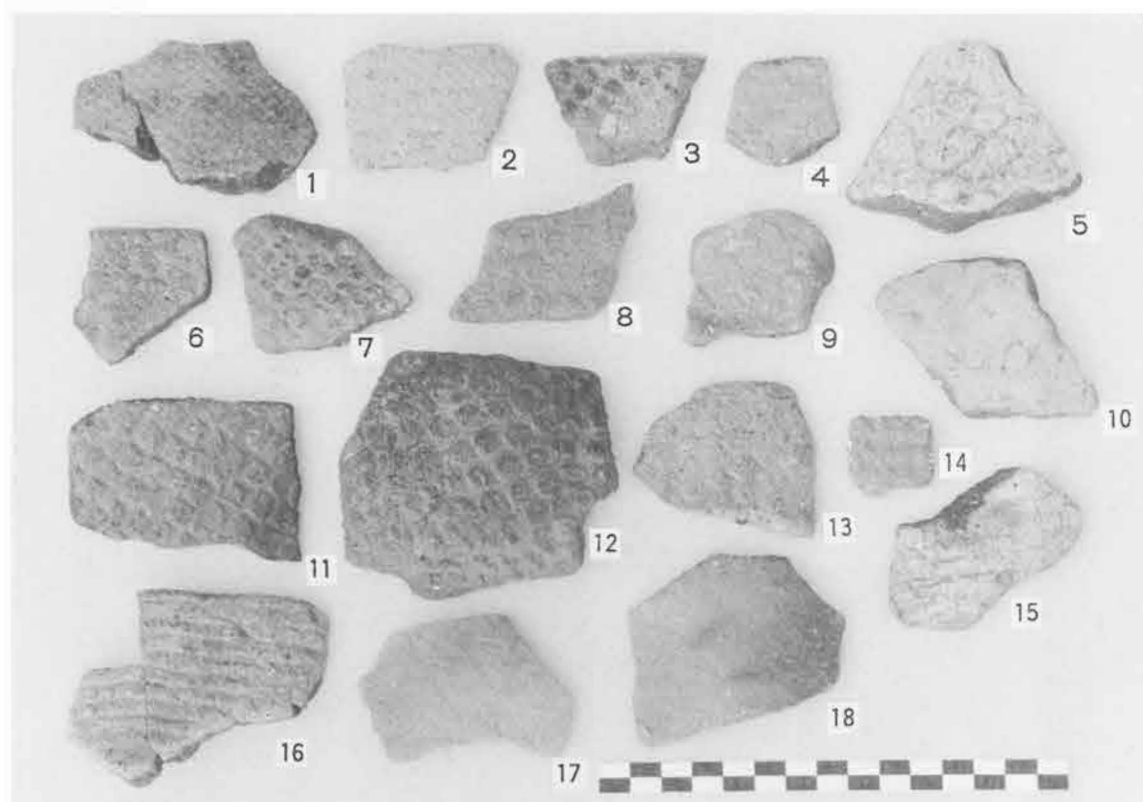
吹上遺跡出土遺物(1)



吹上遺跡出土遺物(2)



吹上遺跡出土石器



吹上遺跡出土縄文土器

久留米市埋蔵文化財調査集報(I)

久留米市文化財調査報告書 第47集

昭和 61 年 3 月 31 日

発行 久 留 米 市 教 育 委 員 会

久留米市城南町15-3

編集 久留米市教育委員会文化部文化財担当

印刷 (有) 猪 飼 プ リ ン ト

久留米市東和町6-18